

推薦のことば

(順不同)

十月一日(火)

國勢調査。ルンバント講習のま

どらかな夢を妨害しただけのこと。

久野 収・評論家

『時局新聞』が創刊されたのは、一九三二年八月。ぼくはこの年の三月に京都大学を卒業していたが、翌年には滝川教授強制免官の「京大事件」が起こされたことだ。荒れ狂う日本ファシズムの大津波は、しかしまだ、学問・思想の自由を守ろうとするひとびとの抵抗をも呼び覚ました。

ぼくたちが雑誌『世界文化』を創刊し、民主戦線の文化運動を開拓したのは三五年二月だったが、それに先行するように関西では『現代新聞批判』が三三年に、そして東京で長谷川国雄さんの『時局新聞』が三二年に創刊された。ぼくはもちろん、愛読者のひとりで、その猛烈なファシズム批判や腑抜けた大新聞の批判、そして文壇や政界の裏話、めったに手に入らない国内外からのマル秘扱いの文書などを楽しみに待ちうけたものだ。長谷川さんはあくまで大衆——今で言えば市民——の立場に立つて、大衆が本当に知りたい、知らねばならぬ情報を提供しようと試みていた。

だから当然ながらも、しばしば発禁の厄にあつてはいたが、直接購読やさまざまな手を使つて、よくも四年ものあいだ、あの暗黒の時代に刊行を続けたものだ。六〇年余ぶりの復刻に、深い感動をおぼえる。



時代の悪氣流に抗する小新聞の雄

高橋新太郎

・学習院女子大学教授

へほんとうの日本が分る」というキャッチコピーの通り、「満州事変」後の、及腰で次第に時代のファシズム化に靡いてゆく大新聞に対して、時局の真を報道する時代の鏡として、またジャーナリズムの内部批判者として、小新聞の心意気、矜持を示したのが、長谷川国雄が編集・発行人として執筆にも加わった『時局新聞』である。編集顧問には、赤神良譲・大宅壮一のほか、後には青野季吉・秋田雨雀・早坂二郎・貴司山治・新居格・戸坂潤らも加わる。執筆陣には、荒畑寒村・加藤勘十・猪俣津南雄・石浜知行・向坂逸郎・大森義太郎・鈴木茂三郎・水野広徳・清沢冽・岡邦雄・中野重治・窪川鶴次郎・小熊秀雄等々。

第二号で早くも「安寧秩序を紊す」故をもつて発禁処分を受けるが、時代の悪氣流の中で、検閲をしきぎながら自由な言論の保持に力闘する。「満州事変」の九月一八日を記念して、毎月一八日を言論の自由デーとせよとの提案もあつた。人民戦線問題についていち早く言及したのも、学芸自由同盟の再興を最も熱心に説いたのもこの『時局新聞』である。唯物論研究会や学芸自由同盟等の「思想団体訪問」の連載記事など時宜にかなつた好企画も多い。昭和一〇年六月二十四日の第一一號からは、「プロレタリア文学の新しき昂揚」をうたつて、文学欄の充実もはかつている。民衆の知る権利を一貫して主張する長谷川は、自ら「非常時ジャーナリズムの異端者」と自負した。



「人民戦線のベルト」

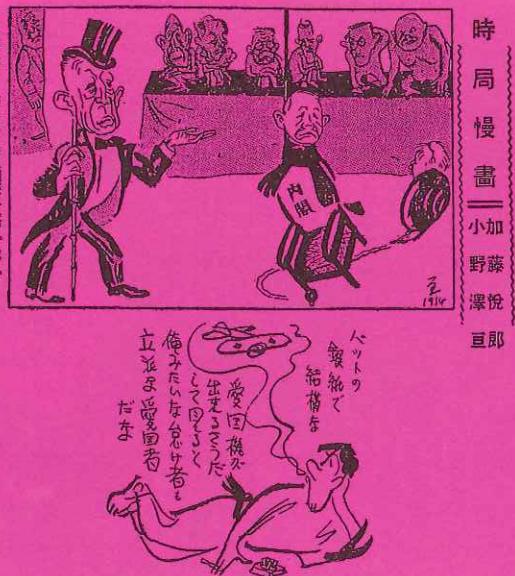
犬丸義一

・大東文化大学講師

『時局新聞』は、一九三二年八月一五日から一九三六年七月一〇日の編集部の検挙まで隔週ないし週刊で発行された社会情報誌である。発行責任者は長谷川国雄で編集顧問に青野季吉、赤神良譲、大宅壮一、鈴木茂三郎、山崎靖純がいた進歩的立場にたつた情報誌であった。創刊当初は政界・財界・軍部の内情暴露や既成新聞批判が多くたが次第に勤労者向けに変わり、当時の社会運動・文化運動の情報が増えていった。編集顧問には前記の五名の外に秋田雨雀、貴司山治、戸坂潤、早坂二郎、新居格、野崎龍七が加わった。次第に日本における「人民戦線のベルト」(一六〇号)の役割を果たすようになった。

私は『日本人民戦線運動史』(一九七八年、青木書店)を執筆したとき資料として利用したが、当時の日本人民戦線運動を知る好資料をなしている。月刊ではなく週刊であつたことは人民戦線的動向の情報誌としての役割を果たしたといえよう。今日、この時期の社会・政治・文化的動向、とくに日本人民戦線の動向を知る好資料である。

今回本誌が復刻されることは、日中戦争勃発前の一九三〇年代の動向を知るのに役たつことであり、日本現代史研究に貢献すると、期待している。



時局漫畫 小野藤澤悦 亘郎

内閣裏透 通は一向に御用にあづからず

復刻版『時局新聞』刊行概要

概要 1932(昭和7)年8月～1936(昭和11)年7月

全2巻 第1巻(第1号～第87号) 1932年8月～34年12月
第2巻(第88号～第164号) 1935年1月～36年7月

B4判／上製／総674頁

付録 解説・解題・索引 (第1巻巻頭に収録)

解説 犬丸義一 <大東文化大学講師>

解題 桑尾光太郎 <学習院大学史料館助手>

推薦 久野 収 高橋新太郎 犬丸義一 <順不同>

本体価格 50,000円+税

関連図書<復刻版>ご案内

現代新聞批判 全7巻 別冊1

本紙は、『大阪朝日新聞』出身のジャーナリスト太田梶太が、十五年戦争のさなか、1933年に創刊したメディア批判のメディアである。その既成ジャーナリズム批判は痛烈で、軍部や言論統制に迎合する新聞のあり方を糾弾し、同時に新聞人への殺傷事件や舌禍事件などを見逃さない。住谷悦治による「学者転向物語」「大学教授華想物語」などは戦時下の知識人の思想の脆弱さを衝いている。ファシズムが荒れ狂う時代にジャーナリスト主体の確立と勇気ある連帶を訴えて『世界文化』『土曜日』と同様、関西で体制に抵抗した数少ないジャーナリズムのひとつとして復刻する。

- 1933年11月～43年3月
- 監修・解説=門奈直樹
- 別冊=解説・総目次・索引
- A4判・上製・総2,676ページ
- 本体価格=140,000円+税

人物評論 全5巻 別冊1

大宅壮一編集の評論雑誌である本誌は、十五年戦争下の閉塞的状況下に旺盛なジャーナリズム精神を以て人物評論・社会時評を敢行した雑誌である。暴露記事「看板に偽りあり」「新人推奨」「人物内報」「ジャーナリズム内報」や大学教授陣を揶揄した「低脳教授列伝」「インテリ・ルンペン第一課」のほか「プロ文化運動はどうなる?」「老社会主義者座談会」など風刺を伴いながら痛烈な批判精神が生きた評論のなかに大宅の面目が躍如としている。「この密閉された室内に涼風をもたらすものは誰ぞ!」大宅の批評精神を体現した本誌を全号復刻する。

- 1933年3月～34年3月
- 解説=尾崎秀樹
- 別冊=解説・総目次・索引
- 菊判・上製・総2,524ページ
- 本体価格=85,000円+税

不
一
出
版

表示
価格は
全て
税別